

# 深川の唄

永井荷風

青空文庫



四谷見付よつやみつけから築地つぎじり両国りやうごく行の電車でんしゃに乗った。別に何処どこへ行くという当あてもない。船でも車でも、動いているものに乗って、身体からだを揺ゆられるのが、自分には一種の快感を起させるからで。これは紐ニュー育ヨークの高架鉄道、巴里パリの乗合馬車の屋根裏、セエヌの河船かわぶねなどで、何時いつとはなしに妙な習慣になつてしまつた。

いい天気である。あたたかい。風も吹かない。十二月も早や二十日過ぎなので、電車の馳はせ行く麴こうじ町まちの大通りには、松竹まつたけの注目飾しめかざり、鬼灯ほおずき提灯ちようちん、引幕ひきまく、高張たかはり、幟のぼりや旗のさまざまが、汚れた瓦屋根と、新築した家の生なまなま々ましい木の板とに対照して、少しの調和もない混乱をば、なお更無残に、三時過ぎの日光ひかげが斜めに眩まぶしく照てらしている。調子の合わない広告の楽隊が彼方かなた此方こなたから騒々しく囃はやし立てている。人通りは随分はげ烈れつしい。調子けれども、電車の中は案外あんがいすいていて、黄い軍服きいろをつけた大尉たいいらしい軍人が一人、片かたす隅みに小さくなつて兵卒が二人、折革包おりかばんを膝ひざにして請負師うけおいし風の男おとこが一人、掛取りかけとらしい商人あきんどが三人、女学生が二人、それに新宿しんじゆくか四ツ谷よつやの婆芸者ばあげいしやらしい女おんなが一人乗

つているばかりであつた。日の光が斜めに窓からさし込むので、それを真面に受けた大尉の垢じみた横顔には剃らない無性髯が一本々々針のように光っている。女学生のでこでこした庇髪が赤ちやけて、油についた塵が二目と見られぬほどきたならしい。一同黙つていずれも唇を半開きにしたまま遣り場のない目で互に顔を見合わしている。伏目になつて、いろいろの下駄や靴の先が並んだ乗客の足元を見ているものもある。何万円とか書いた福引の広告ももう一向に人の視線を引かぬらしい。婆芸者が土色した薄ぺらな唇を振じ曲げてチュウツチュウツと音高く虫歯を吸う。請負師が大吠の後でウーイと一ツ曖をする。車掌が身体を折れるほどに反して時々はずれる後の綱をば引き直している。

麴町の三丁目、ぶら提灯と大きな白木綿の風呂敷包を持ち、ねんねこ半纏で赤児を負つた四十ばかりの醜い女房と、ベエスボオルの道具を携えた少年が二人乗つた。少年が夢中で昨日済んだ学期試験の成績を話し出す。突然けたたましく泣き出す赤児の声に婆芸者の歯を吸う響ももう聞えなくなつた。乗客は皆みな泣く子の顔を見ている。女房はねんねこ半纏の紐をといて赤児を抱き下し、洗紙のような肌をば平気で、襟垢だらけの襟を割つて乳房を含ませる。赤児がやつとの事泣き止んだかと思うと、車掌が、「半蔵門、半蔵門でございませす。九段、市ヶ谷、本郷、神田、小石川方面のお方はお乗

換え——あなた小石川はお乗換ですよ。お早く願います。」と注意されて女房は真黒な乳房をぶらぶら、片手に赤児片手に提灯と風呂敷包みを抱え込み、周章あわてふためいて降り掛ける。その入口からは、待つていた乗客が案外にすいている車と見るやなお更に先きを争い、出ようとするとする女房を押しかえして、われがちに座を占める。赤児がヒーヒー喚わめき立てる。おしめが滑り落ちる。乗客が構わずそれをば踏み付けて行こうとするので、此度こんどは女房が死物狂しにものぐるいに叫び出した。口癖になつた車掌は黄きいろい声で、

「お忘れものの御在ございませんように。」と注意したが、見るから汚いおしめの有様。といつて黙つて打捨てても置かれず、詮せん方かたなしに「おあぶのう御在ございますから、御ゆるり願います。」

漸ようやくにして、チインと引く鈴の音。

「動きます。」

車掌の声に電車ががたりと動くや否や、席を取りそこねて立っていた半白はんぱくの婆ばばあに、その娘らしい十八、九の銀杏返いちょうがえし前垂掛まえだれがけの女が、二人一度に揃そろつて倒れかけそうにして危くも釣つり革かわに取りすがつた。同時に、

「あいたツ。」と足を踏まれて叫んだものがある。半纏はんてん股引ももひきの職人である。

「まあ、どうぞ御免なすつて……。」と銀杏返は顔を真赤に腰をかがめて会釈しようとする、電車の動揺でまたよろけ掛ける。

「ああ、こわい。」

「おかけなさい。姉さん。」

薄髯の二重廻が殊勝らしく席を譲った。

「どうもありがとう……。」

しかし腰をかけたのは母らしい半白の婆であった。若い女は丈伸をするほど手を延ばして吊革を握締める。その袖口からどうかすると脇の下まで見え透きそうなるのを、頻と気にして絶えず片手でメレンスの襦袢の袖口を押えている。車はゆるやかな坂道をば静かに心地よく馳せ下りて行く。突然足を踏まれた先刻の職人が軀声をかき出す。誰れかが『報知新聞』の雑報を音読し初めた。

三宅坂の停留場は何の混雑もなく過ぎて、車は瘤だらけに枯れた柳の並木の下をば土手に沿うて走る。往來の右側、いつでも夏らしく繁った老樹の下に、三、四台の荷車が休んでいる。二頭立の箱馬車が電車を追抜けて行った。左側は車の窓から濠の景色が絵のように見える。石垣と松の繁りを頂いた高い土手が、出たり這入ったりして、その傾斜の

やがて静かに水に接する処、日の光に照らされた岸の曲線は見渡すかぎり、驚くほど鮮かに強く引立つて見えた。青く濁った水の面は鏡の如く兩岸の土手を蔽う雑草をはじめ、柳の細い枝も一條残さず、高い空の浮雲までをそのままはつきりと映している。それをば土手に群る水鳥が幾羽となく飛入っては絶えず、羽ばたきの水沫に動し砕く。岸に沿うて電車がまがった。濠の水は一層広く一層静かに望まれ、その端れに立っている桜田門の真白な壁が夕方前のやや濁った日の光に薄く色づいたままいずれが影いずれが実在の物とも見分けられぬほど鮮かに水の面に映っている。間もなく日比谷の公園外を通る。電車は広い大通りを越して向側のやや狭い街の角に止まるのを待ちきれず二、三人の男が飛び下りた。

「止りましてからお降り下さい。」と車掌のいうより先に一人が早くも転んでしまった。無論大した怪我ではないと合点して、車掌は見向きもせず、曲り角の大厄難、後の綱のはずれかかるとの一生懸命に引直す。車は八重に重る線路の上をガタガタと行悩んで、定めの停留場に着くと、其処に待っている一団の群集。中には大きな荷物を脊負った商人も二、三人交つていた。

例の上り降りの混雑。車掌は声を黄くして、

「どうぞ中の方へ願います。あなた、恐入りますが、もう少々最一ツ先きの釣革に願います。込み合いますから御懐中物を御用心。動きます。ただ今お乗り換えの方は切符を拝見致します。次は数寄屋橋、お乗換の方は御在いませんか。」

「ありますよ。ちよいと、乗りかえ。本所は乗り換えじゃないんですか。」髪を切り下げにした隠居風の老婆が逸早く叫んだ。

けれども車掌は片隅から一人々々に切符を切て行く忙しき。「往復で御在いますか。十銭銀貨で一銭のお釣で御在います。お乗換は御在いませんか。」

「乗換ですよ。ちよいと。」本所行の老婆は首でも絞められるように、もう金切声になつている。

「おい、回数券だ、三十回……。」

烏打帽に双子縞の尻端折、下には長い毛糸の靴足袋に編上げ靴を穿いた自転車屋の手代とでもいいような男が、一円紙幣二枚を車掌に渡した。車掌は受取つたなり向うを見て、狼狽て出て行き数寄屋橋へ停車の先触れをする。尾張町まで来ても回数券を持つて来ぬので、今度は老婆の代りに心配したのはこの手代で。しかしさすがに声はかげず、鋭い眼付で瞬き一ツせず車掌の姿に注目していた。車の硝子窓から、印度や南



清の殖民地で見るような質素な実利的な西洋館が街の両側に続いて見え出した。車の音が俄かに激しい。調子の合わない楽隊が再び聞える。乃ち銀座の大通を横切るのである。乗客の中には三人連の草鞋ばき菅笠の田舎ものまで交つて、また一層の大混雑。後の降り口の方には乗客が息もつけなほほどに押合い今にも撲り合いの喧嘩でも始めそうにいい罵っている。

「込み合いますから、どうぞお二側に願います。」

釣革をば一ツ残らずいろいろの手が引張っている。指環の輝くやさしい白い手の隣りに馬蹄のように厚い母指の爪が聳えている。垢だらけの綿ネルシャツの袖口は金ボタンのカフスと相接した。乗換切符の要求、田舎ものの狼狽。車の中は頭痛のするほど騒しい中に、いつか下町の優しい女の話声も交るようになった。

木挽町の河岸へ止った時、混雑にまぎれて乗り逃げしかけたものがあるとかいうので、車掌が向うの露地口まで、中折帽に提革包の男を追いかけて行つた。後からつづいて停車した電車の車掌までが加勢に出かけて、往来際には直様物見高い見物人が寄り集つた。

車の中から席を去つて出口まで見に行くものもある。「けちけちするな——早く出さ

ねえか——正直に銭を払つて此輩アいい迷惑だ。」と叫ぶものもある。

不時の停車を幸いに、後れ走せにかけつけた二、三人が、あわてて乗込んだ。その最後の一人は、一時に車中の目を引いたほどの美人で、赤いてがらをかけた年は二十二、三の丸鬻である。オリブ色の吾妻コオトの袂のふりから二枚重の紅裏を揃わせ、片手に進物の菓子折でももあるらしい絞りの福紗包を持ち、出口に近い釣革へつかまると、その下の腰掛から、

「あら、よし子さんじゃいらっしやいませんか。」と同じ年頃、同じような風俗の同じような丸鬻が声をかけた。

「あら、まア……。」と立っている丸鬻はいかにもこの奇遇に驚いたらしく言葉をきる。

「五年ぶり……もつとになるかも知れませんか。よし子さん。」

「ほんとに……あの、藤村さんの御宅で校友会のあったあの時お目にかかったきりでしたねえ。」

電車がやつと動き始めた。

「よし子さん、おかけ遊ばせよ、かかりますよ。」と下なる丸鬻は、かなり窮屈らしく詰まっている腰掛をグット左の方へ押しつめた。

押詰められて、じじむさい襟えりまき巻した金貸らしい爺おやじが不満らしく横目に睨にらみかえしたが、真まっしろ白な女の襟元もとに、文句はいえず、押し敷かれた古臭にじゅうまわい二重廻はねしの翼はねを、だいじそうに引取りながら、順送りに席いを居いざった。赤いいてがらは腰こしをかけ、両りょうそで袖そでと福紗包ふくさづつみを膝ひざの上うへにのせて、

「校友会はどうしちまつたんでしよう、この頃はさつぱり会費も取りに来ないんですよ。」

「藤村さんも、おいそがしいんですよ、きつと。何しろ、あれだけのお店ですからね。」

「お宅さまでは皆さまおかわりも……。」

「は、ありがとう。」

「どちらまでいらつしやいますの、私はもう、すぐそこで下りますの。」

「新富町しんとみちようですか。わたくしは……。」

いいかけた処へ車掌が順送りに賃錢を取りに来た。赤いいてがらの細君は帯の間から塩瀬しおせのちいさ紙かみいれ入いれを出して、あざやかな発音で静かに、

「のりかえ、ふかがわ。」

「茅場町かやばちようでおのりかえ。」と車掌が地方いなかなま訛なまりりで蛇足だそくを加えた。

真直まっすぐな往來おうらいの両側りょうがわには、意気な格子戸こうしど、板塀いたべいつづき、磨すりがらすの軒燈けんとうさてはま

た霜よけした松の枝越し、二階の欄干てすりに黄八丈きはちじょうに手拭地てぬぐいじの浴衣ゆかたをかさねた襦袢じゆたんを干した家もある。行書で太く書いた「鳥」「蒲焼かばやき」なぞの行燈あんどうがあちらこちらに見える。忽ちたちまち左右がぼつと明く開けて電車は一条の橋へと登りかけた。

左の方に同じような木造の橋が浮いている。見下すと河岸の石垣は直線に伸びてやがて正しい角度に曲っている。池かと思うほど静止した堀割の水は河岸通かしどおりに続く格子戸づくりの二階家から、正面に見える古風な忍返しのびがえしをつけた黒板塀の影までをはつきり映している。丁度汐時しわざきであろう。泊っている荷舟にぶねの苦屋根とまやねが往来よりも高く持上つて、物を煮る青い煙が風のない空中へと真直まつすぐに立昇たてあがりっている。鯉こい口半纏くちぼんでんに向鉢巻むこうはちまきの女房が舳ふなばたから子供のおかわを洗っている。橋の向角むこうかどには「かしぶね」とした真白な新しい行燈と葭簀よしずを片寄せた店先の障子しょうじが見え、石垣の下には舟板を一枚残らず綺麗きれいに組み並べた釣舟が四、五艘浮いている。人通りは殆どない、もう四時過ぎたかも知れない。傾いた日輪をば眩まぶしくもなく正面まともに見詰める事が出来る。この黄味きいろみの強い赤い夕陽ゆうひの光に照りつけられて、見渡す人家、堀割、石垣、凡てすべての物の側面は、その角度を鋭く鮮明にしてはいたが、しかし日本の空気のは非なさは遠近を区別すべき些少さししょうの濃淡をもつけないので、堀割の眺望ながめはさながら旧式の芝居ひらたの平い書割かきわりとしか思われない。それが今、自分の

眼にはかえつて一層適切に、黙阿弥、小団次、菊五郎らの舞台をば、遺憾なく思い返させた。あの貸舟、格子戸づくり、忍返し……。

折もよく海鼠壁の芝居小屋を過ぎる。しかるに車掌が何事ぞ、

「スントミ町。」と発音した。

丸鬚の一人は席を立つて、「それじゃ、御免ください、どうぞお宅へよろしく。」

「ちツと、おひまの時いらしツて下さい。さよなら。」

電車は桜橋を渡つた。堀割は以前のよりもずツと広く、荷船の往来も忙しく見えたが、道路は建て込んだ小家と小売店の松かざりに、築地の通りよりも狭く貧しげに見える人が何という事もなく入り乱れて、そろそろ歩いている。坂本公園前に停車すると、それなり如何ほど待つていても更に出発する様子はない。後にも先にも電車が止つている。運転手も車掌もいつの間にもやら何処へか行つてしまった。

「また喰つたんだ。停電にちげえねえ。」

糸織の羽織に雪駄ばきの商人が臘虎の襟巻した赧ら顔の連れなる爺を顧みた。萌黄の小包を首にかけた小僧が逸早く飛出して、「やア、電車の行列だ。先の見えねえほど続いてらア。」と叫ぶ。

車掌が革包かばんを小脇に押えながら、帽子を阿弥陀あみだに汗をふきふき駈かけ戻かへつて来て、「お気の毒様ですがお乗るかえの方はお降りを願います。」

声を聞くと共に乗客の大半は一度に席を立った。その中には唇とがを尖とがらして、「どうしたんだ。よつぽどひまが掛かるのか。」

「相済あいみません、この通りで御在まいます。茅場町かやばちようまでつづいておりますから……。」  
菓子折らしい福紗包ふくさづつみを携かえた彼の丸鬚まるまげの美人が車を下りた最後の乗客であつた。

## 二

自分は既に述べたよう何処どこへも行く当てはない。大勢が下車するその場の騒さわぎに引入れられて何心なにこころもなく席を立ったが、すると車掌は自分が要求もせぬふかがわゆきのに深川行のりかの乗換切符を渡してくれた。

人家の屋根に日を遮さへぎられた往來おうらいには海老色えびいろに塗ぬり立てた電車が二、三町ちようも長く続いてゐる。茅場町かやばちようの通りから斜めにさし込んで来る日光ひかげで、向角むこうかどに高く低く不揃ふぞろいに立っている幾棟いくむねの西洋造りが、屋根と窓ばかりで何一ツ彫刻の裝飾をも施さぬ結果である

う。如何にも貧相に厚みも重みもない物置小屋のように見えた。往来の上に縦横の網目を張っている電線が透明な冬の空の眺望を目まぐるしく妨げている。昨日あたり山から伐出して来たといわぬばかりの生々しい丸太の電柱が、どうかすると向うの見えぬほど遠慮会釈もなく突立っている。その上に意匠の技術を無視した色のわるいペンキ塗の広告がベタベタ貼つてある。竹の葉の汚らしく枯れた松飾りの間からは、家の軒ごとに各自勝手の幟や旗が出してあるのが、いずれも紫とか赤とかいう極めて単純な色ばかりを拵んでいる。自分は憤然として昔の深川を思返した。幸い乗換の切符は手の中にある。自分は浅間しいこの都会の中心から一飛びに深川へ行こう——深川へ逃げて行こうという押えられぬ欲望に迫められた。

数年前まで、自分が日本を去るまで、水の深川は久しい間、あらゆる自分の趣味、恍惚、悲しみ、悦びの感激を満足させてくれた処であった。電車はまだ布設されていなかったが既にその頃から、東京市街の美観は散々に破壊されていた中で、河を越した彼の場末の一劃ばかりがわずかに淋しく悲しい裏町の眺望の中に、衰残と零落とのいい尽し得ぬ純粹一致調和の美を味わしてくれたのである。

その頃、繁華な市中からこの深川へ来るには電車の便はなし、人力車は賃銭の高い

ばかりか何年間とも知れず永代橋の橋普請で、近所の往来は竹矢来で狭められ、小石や砂利で車の通れぬほど荒らされていた処から、誰れも彼れも、皆汐溜から出て三、十間堀の堀割を通って来る小さな石油の蒸汽船、もしくは、南八丁堀の河岸縁に、「出ますよ出ますよ」と呼びながら一向出発せずに豆腐屋のような鈴ばかり鳴り立てている櫓舟に乗り、石川島を向うに望んで越前堀に添い、やがて、引汐上汐の波にゆられながら、印度洋でも横断するようにやつとの事で永代橋の河下を横ぎり、越中島から蛤町の堀割に這入るのであった。不動様のお三日という午過ぎなぞで参詣戻りの人々が筑波根、繭玉、成田山の提灯、泥細工の住吉踊の人形なぞ、さまざまな玩具を手にさげたその中には根下りの銀杏返しや印半纏の頭なども交っていて、幾艘の早舟は櫓の音を揃え、碇泊した荷舟の間をば声を掛け合い、静な潮に従って流れて行く。水にうつる人々の衣服や玩具や提灯の色、それをば諸車止と高札打つたる朽ちた木の橋から欄干に凭れて眺め送る心地の如何に絵画的であつたらう。

夏中洲崎の遊廓に、燈籠の催しのあつた時分、夜おそく舟で通つた景色をも、自分は一生活れまい。苦のかげから漏れる鈍い火影が、酒に酔って喧嘩している裸体の船頭を照す。川添いの小家の裏窓から、いやらしい姿をした女が、文身した裸体の男と酒を呑



んでいるのが見える。水門すいもんの忍返しのびがえしから老木おいぎの松が水の上に枝を延のばした庭構え、燈影ほかげし  
 ずかな料理屋の二階から芸者げいしやの歌う唄うたが聞える。月が出る。倉庫の屋根のかげになって、  
 片側は真暗まっくらな河岸縁かしぶちを新内しんないのながしが通る。水の光で明あかるく見える板橋の上を提灯ていとうつけ  
 た車が走る。それらの景色をばいい知れず美しく悲しく感じて、満腔まんこうの詩情を托たくしたそ  
 の頃の自分は若いものであった。煩悶はんもんを知らなかった。江戸趣味の恍惚こうこつのみに満足し  
 て、心は実に平和であった。硯友社けんゆうしやの芸術を立派なもの、新しいものだと思っていた。  
 近松ちかまつや西鶴さいかくが残した文章で、如何なる感情の激動をもいい尽つくし得るものと安心してい  
 た。音波おんばの動揺、色彩の濃淡、空気の軽重けいちゆう、そんな事は少しも自分の神経を刺戟しげきしな  
 かった。そんな事は芸術の範圍いに入るべきものとは少しも予想しなかった。日本は永久自  
 分の住む処、日本語は永久自分の感情を自由にいい現あらわしてくるものだと思つて疑わな  
 かった。

自分は今、髯ひげをはやし、洋服を着ている。電気鉄道に乗つて、鉄で出来た永代橋を渡る  
 のだ。時代の激変をどうして感ぜずにいられよう。

夕陽ゆうひは荷舟ほはしらや櫓ふくその輻輳ふくそくしている越前堀からずっと遠くの方をば、眩まぶしく烟けむりのように曇  
 らしている。影のように黒く立つ石川島の前側に、いつも幾艘となく碇泊ほまえせしている帆前

船の横腹は、赤々と日の光に彩られた。橋の下から湧き昇る石炭の煙が、時々は先の見えぬほど、橋の上に立ち迷う。これだけは以前に変らぬ眺めであったが、自分の眼は忽ち佃島つくだじまの彼方かなたから深川へとかけられた一条ひとすじの長い橋の姿に驚かされた。堤の上の小さい松の並木、橋の上の人影までが、はつきり絵のように見える。自分は永代橋の向岸むこうぎしで電車を下りた。その頃は殆ど門並みに知っていた深川の大通り。角の蛤屋はまぐりやには意気な女房がいた。名物の煎餅屋せんべいやの娘はどうしたか知ら。一時跡方あとかたもなく消失させてしまった二十歳時分の記憶を呼び返そうと、自分はきよろきよろしながら歩く。

無論それらしい娘も女房も今は見当てられようはずはない。しかし深川の大通りは相変わらず日あたりが悪く、妙にこの土地ばかり薄寒いような気がして、市中は風もなかったのに、此処ここでは松かざりの竹の葉がざわざわいつて動いている。よく見覚えのある深川座の幟のぼりがたった一本淋しさびげに、昔の通り、横町よこちょうの曲角まがりかどに立っていたので、自分は道路の新しく取広げられたのを殆どほと気付かず、心は全く十年前のなつかしい昔に立返る事が出来た。

つい名を忘れてしまった。思い出せない——一条の板橋を渡ると、やがて左へ曲る横町のぼりに幟のぼりの如く釣つるした幾筋いくすじの手拭てぬぐいが見える。紺と黒と柿色かきいろの配合が、全体に色のない場

末の町とて殊更強く人目を牽く。自分は深川に名高い不動の社であると、直様思返してその方へ曲つた。

細い溝にかかつた石橋を前にして、「内陣、新吉原講」と金字で書いた鉄門をはいると、真直な敷石道の左右に並ぶ休茶屋の暖簾と、奉納の手拭が目覚めるばかり連続つて、その奥深く石段を上つた小高い処に、本殿の屋根が夕日を受けながら黒く聳えている。参詣の人が二人三人と絶えず上り降りする石段の下には易者の机や、筑波根売りの露店が二、三軒出ていた。そのそばに児守や子供や人が大勢立止つていたので、何かと近いて見ると、坊主頭の老人が木魚を叩いて阿呆陀羅經をやつていたのであつた。阿呆陀羅經のとなりには塵埃で灰色になつた頭髪をぼうぼう生した盲目の男が、三味線を抱えて小さく身をかがめながら蹲踞んでいた。阿呆陀羅經を聞き飽きた参詣戻りの人たちが三人四人立止る砂利の上の足音を聞分けて、盲目の男は懐中に入れた櫛のぼちを取り出し、ちよつと調子をしらべる三の糸から直ぐチントンシャンと弾き出して、低い呂の声を咽喉へと呑み込んで、

あきイ——の夜

と長く引張つたところで、つく息と共に汚い白眼をきよろりとさせ、仰向ける顔と共に首

を斜めに振りながら、

夜は——ア

と歌った。声は枯れている。三味線の一の糸には少しのさわりもない。けれども、歌出しの「秋——」という節廻しから拍子の間取りが、山の手の芸者などには到底聞く事の出来ぬ正確な歌沢節であった。自分はなつかしいばかりでない、非常な尊敬の念を感じて、男の顔をば何んという事もなくしげしげ眺めた。

さして年老つているといってもない。無論明治になつてから生れた人であろう。自分は何の理由もなく、かの男は生れついでに盲目ではないような気がした。小学校で地理とか数学とか、事によつたら、以前の小学制度で、高等科に英語の初歩位学んだ事がありはしまいか。けれども、江戸伝来の趣味性は九州の足輕風情が経営した俗悪蕪雑な「明治」と一致する事が出来ず、家産を失うと共に盲目になった。そして榮華の昔には洒落半分の理想であつた芸に身を助けられる哀れな境遇に落ちたのであろう。その昔、芝居茶屋の混雑、お濠いさらの座敷の緋毛氈ひもうせん、祭礼の万燈まんとう花笠はながさに酔つたその眼は永久に光を失つたばかりに、かえつて浅間しい電車や電線や薄ツペらな西洋づくりを打仰ぐ不幸を知らない。よしまた、知つたにしても、こういう江戸ッ児こはわれら近代の人の如く熱烈な嫌悪憤怒を感じ

まい。我れながら解せられぬ煩悶に苦しむような執着を持ってしまい。江戸の人は早く諦めをつけてしまう。すぐと自分で自分を冷笑する特徴をそなえているから。

高い三の糸が頻りに響く。おとするものは——アと歌って、盲人は首をひよいと前につき出し顔をしかめて、

鐘——エエばアかり——

という一番高い節廻をば枯れた自分の咽喉をよく承知して、巧に裏声を使って逃げてしまった。

夕日が左手の梅林から流れて盲人の横顔を照す。しゃがんだ哀れな影が如何にも薄く後の石垣にうつっている。石垣を築いた石の一片ごとに、奉納した人の名前が赤い字で彫りつけてある。芸者、芸人、鳶者、芝居の出方、博奕打、皆近世に關係のない名ばかりである。

自分はふと後を振向いた。梅林の奥、公園外の低い人家の屋根を越して西の大空一帯に濃い紺色の夕雲が物すごい壁のように棚曳き、沈む夕日は生血の滴る如くその間に燃えている。真赤な色は驚くほど濃いが、光は弱く鈍り衰えている。自分は突然一種悲壯な感に打たれた。あの夕日の沈むところは早稲田の森であろうか。本郷の岡であろうか。自分

の身は今如何に遠く、東洋のカルチエエ・ラタンから離れているであろう。盲人は一曲終つてすぐさま、

「更ふけて逢あふ夜の氣苦勞は——」と歌いつづける。

自分はいつまでも、いつまでも、暮行くこの深川の夕日を浴び、迷信の靈境なる本堂の石垣の下に佇たずんで、歌沢の端唄はうたを聴いていたいと思つた。永代えいたい橋ばしを渡つて歸つて行くのが堪たえられぬほど辛つらく思われた。いつそ、明治が生んだ江戸追慕の詩人齋藤さいとう緑雨りよくうの如く滅ほろびてしまいたいような氣がした。

ああ、しかし、自分は遂ついに歸らねばなるまい。それが自分の運命だ、河を隔て堀割を越え坂を上あが上あつて遠く行く、大久保おおくぼの森のかけ、自分の書齋の机にはワグナーの画像の下にニイチエの詩ザラツストラの一卷が開かれたままに自分を待つている……

明治四十一年十二月作

# 青空文庫情報

底本：「すみだ川・新橋夜話 他一篇」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

2005（平成17）年11月25日第23刷発行

底本の親本：「荷風小説 二」岩波書店

1986（昭和61）年6月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：米田

2010年9月5日作成

2011年4月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 深川の唄

永井荷風

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>